



TITLE:

温州龍船と地方社会変遷の艮族誌研究

AUTHOR(S):

呉, 天躍

CITATION:

呉, 天躍. 温州龍船と地方社会変遷の艮族誌研究. 2013年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ報告論文集 :<京都エラスムス計画>から生まれたもの 2014: 44-52

ISSUE DATE:

2014-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/186341>

RIGHT:

温州龍船と地方社会変遷の民族誌研究
呉天躍 (WU TianYue, う・ていえんゆえ) *

一、はじめに

本民族誌¹は、温州地区の伝統的龍舟（端午の節句にレースを行う龍を象った船）と現代的スポーツとしての龍舟活動「健身龍船」（訳者注：以下、「スポーツ龍船」と呼ぶ）を研究対象とし、清の晩期や民国期から現代までの長い歴史的時間の中で考察を進め、1980年代の改革開放後の変化に重点を置く。この一帯の地方的特色を濃厚に残す龍舟活動を手がかりに、限られた視野ではあるが、地方社会の文化変遷を描くことを試みる。

手法において、主に日本の民俗学者である福田アジオの「個別研究法」あるいは「地域民俗学」の概念を借用するのであり、異なる資料間の比較研究（重出立証法）を採るわけではない。このため、本文中では龍船競争現象の起源や、各地の競争習俗の文化伝播とその相違については論じず、地域社会の集団の長期的相互作用と実践から、特定の地域の人々の繋がりや特定の民俗事象が伝承する条件、そしてその原因と意義を明らかにする。

具体的な資料となるのは以下の三種類である。1、歴史史料。主に参考とするのは、宋代以降の温州地方史（瑞安県を主とする）や『東瓯逸事匯録』、『岐海瑣談』、『張桐日記』、『厚莊日記』などの文人の著作である。このほか、地域の重要な碑文、民間伝承、中華人民共和国建国後の瑞安市档案馆所蔵の政府が龍船を禁止した際の公文書などである。2、参与観察とインタビュー。地域に詳しい古老（郷土史家や一般住民含む）へのインタビューを行い、重要な口述資料を収集した。自ら現在のスポーツ龍船クラブの関連活動にも参加し、インタビューを行った。3、現代の報道や、政協委員の提案や龍舟フォーラムの情報。これらの報道や提案、ネット上のやり取りについては、初歩的な言説分析(discourse analysis)を行った。

本民族誌は、文化の「深い描写」を通して、以下の問題へ回答しようとする試みである

- 1) 温州の伝統的龍舟活動の過程全体、現地の人々が言うところの、「深度遊戯(deep play)」とは何か。伝統的龍舟活動はどのような社会関係を構築していたのか。
- 2) 現代のスポーツ龍舟はどのように温州に伝わったのか。また、いかに伝統龍舟と形式的に組み合わせたのか。

龍船活動解禁の後、積極的に省級および国家級の非物質文化遺産への登録を申請し、「中国龍船名城」にするための努力を行った。これらの事実は、国家や地方政府と龍船の間のどのような複雑な関係を反映しているのか？

* 2012年南京大学社会人類学研究所修士課程修了（法学[社会人類学]修士）。現在、中央美術学院人文学院文化遺産専攻博士課程に在籍。

¹ 本報告論文は、報告者の修士論文『温州龍船と地域社会変遷の民族誌研究』を圧縮して書き直したものであり、紙幅の関係から多くの文献名や図表、データが省略されている。日本国立民族学博物館の外来研究員・今中崇文氏には本論の修正に対して的確な意見をいただいた。今回の研修時に、国立民族学博物館の河合洋尚助教から広州西関地域の龍船に関する考察も教えていただき、それも本論に大きな示唆を与えているが、日を待って補充をしたい。心より感謝申し上げる。

二、伝統的龍舟活動と社会関係の構造

渡辺欣雄は香港長洲島の水生活者と漁民が中心となる「龍舟祭」を考察した後に、「龍舟祭」は儀礼表現により構成される複合的な祭祀であることを指摘した。儀礼過程の三つの側面、すなわち龍舟の聖化儀礼、厄払い（祝福攘災）儀礼、龍舟競漕儀礼と温州龍舟の基本儀式構造には共通性がある。吳麗平は温州韓田村端午龍舟競漕への観察を通して、龍舟競漕は地方社会が共同して死者の世界とともに一種の良好な秩序を打ち建てるためのものであると考えた。（吳麗平、2007:352-366）

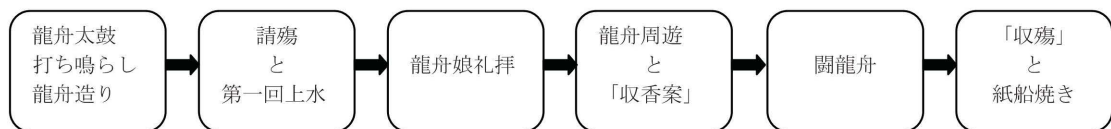
しかし、伝統的龍舟競漕は鬼神の世界と作り出す一種の秩序であり、また人間同士の互恵的交換でもある。本報告では、世俗的側面の互恵関係に重点を置く。つまり、地方社会がいかにして龍舟競漕の助けを借りて、社区（学術上はコミュニティとも訳されるが、最小行政単位という側面も持つ）の境界や集団間の関係を確認し調整するのかということである。

温州地区龍船の活況は客観的には、中国東南沿海地区密集している河川網に非常に関係がある。本研究が対象とする瑞安龍船は主に温瑞塘河一帯で活動している。温州では、山岳部の泰順、文成などを除いて、沿塘河、瓯江兩岸の住民は等しく龍船の悠久伝統を有している。本稿が考察する村落も温瑞塘河沿岸に分布している。比較の便宜のため、瑞安の中の莘塍鎮、塘下鎮および都市部（元・城関鎮、元・安陽鎮）を最終的に主なフィールドとした。瑞安を選択したのは、瑞安龍船は温州龍船の中で「最も迷信的で、最も封建的である」口承があり、多くの龍船の事件がここから生まれており、さらに郷鎮を跨いだ活動を有し、瓯海や平陽などとの密接な往来の習慣がある。統計によると、1980年代に瑞安全県は毎年数百の龍船が水上活動に参加しており、中でも1985年には408隻にいたり、温州市全体の龍船総数の3分の1を超過しており、浙江省全体の龍船活動の流行年には総数の30%前後を占めている。期間も長く、龍船活動の長い年には農曆4月から始まり、農曆「六月六」に終わる（瑞安龍船活動簡史、2004: 23）。しかし、瑞安の龍船は2008年から政府による禁止を受け、瓯海区新橋鎮と潘橋鎮、樂清樂成鎮の伝統的龍船はなお活況なので、比較対象とした。

蛇行した塘河の兩岸には、数百の村落が存在している。端午の節句になると、その数百の村落が龍船試合のために集まり、格闘技の大会を彷彿とさせ、歴史的記憶や、世代の怨讐や悲喜榮辱のすべてが噴出する。

温州一帯の龍舟のスケジュールは、一般には農曆4月の頭から始まり5月下旬に終わるというものであり、この活動は基本的には以下のように図示できる。

表1 温州の伝統的龍舟の行事過程の模式図²



毎年端午の競漕の集団的狂騒は民衆の日常生活のリズムとはかけ離れたものであり、内部では各種の博打や喧嘩が起きている。以下では、異なる社会的役割の文化実践（cultural practice）および異なる部分の社会的意義を分析する。

2 ここでは理解しやすくするために簡略化している。

(一) 龍舟娘と龍舟活動の区域区分

龍舟活動は現地の影響が深く入り込む曆的伝統として、一定の実践を墨守し、地理空間上に固定的な記憶を形成する。このため、龍舟活動の開催は、現在の行政区の区分に基くものではなく、歴史上の区画である「片区」に従っているのである。この片区とはまるで「勢力図」のようなものである。瑞安龍舟を事例にすると、慣習に従って、4つの片区に分けられる。ひとつの片区の龍舟は競漕時には基本的にその片区の龍舟だけが闘龍をする。瑞安では、片区ごとにその片区に所属する龍舟娘を持つ。龍舟娘とは何か。龍舟娘も社区のあるひとつの龍舟、一般には各片区の古い龍舟のことを指し、闘龍には参加せず、主に各龍舟間の争いを調停を行い、「裁判」の役割を担う。龍舟娘は通常はその村の民間信仰の廟に括りつけられている。その片区の所有する龍舟は、名義上はすべてその龍舟娘の子龍や孫龍なのである。これらは同じ一つの龍舟娘の龍舟に所属し、現地の人の言によれば、すべて「兄弟龍」³なのである（訳者注：現代中国語では「娘」は日本語の「母」の意を表す場合がある）。毎年、各村の龍舟は「上水」や散河、収香時には、すべて各自が所属する龍舟娘を参拝するのである。

瑞安龍船は慣習に従い、4つの片区に分けられる。ひとつの片区の龍船は競漕時には基本的に自分の片区の龍船と闘龍をする。具体的に言えば、市区（老城区が所轄する範囲で、安陽新区を含まない）と上望鎮がひと組になり、莘塍鎮と汀田鎮、東山鎮がひと組、塘下鎮と大典下がひと組、飛雲鎮は単独でひと組となる。これら片区およびそれらの歴史は龍船娘を以下のように定めている。

1) 市区および上望。龍船娘は三隻に限る。西門河埠頭（竹排頭）、三官殿的太白老龍、東門硎橋頭の青龍（城内と西郊、北郊龍船は塘河へ出るときに必ず通る場所なので、このため格が比較的に高い）、南門濠河潭天後宮の金龍。

2) 莘塍、汀田および東山。これら地方の龍船娘はすべて莘塍下村東堂廟の大青（別称、烏龍娘、青龍娘）。

3) 塘下と大典下。この両地方は龍船娘は塘西にある。

4) 飛雲鎮。平陽県と接しており、龍船を造る習慣は瑞安ではなく平陽に近い。飛雲一帯は水域に沿って、数村でひとつの龍船社を構成しており、俗には18社、24社、36社あるとも言われるが、18社が18隻の龍船を所有している。各社が1隻の龍船を所有していることになる。その他の龍船はすべて兄弟龍である。ひとつの社の中に、地域で最も優勢な村があり、社の中に河主がおり、これが「大兄」と呼ばれ、龍船が集まる時に、河主の龍船は巡回と秩序維持のみを行い、他の龍船も挑発行為は行わない。

注意すべきは、温州の龍船がもしもひとつの村の事であれば、今日のような状況にはならなかったであろうことであり、またこれまで地理的要因や生態学的特性が看過されてきたと

³ 同じ「龍舟娘」に属し「兄弟龍」と称していても、塘下のフィールドワーク時に現地の人が言うには、龍舟の間の殴り合いは「兄弟龍」の間でも起きると言う。村民が笑って言うには、「これはよくわかるよ、兄弟喧嘩なんてよくあることじゃないか」とのことである。「兄弟龍」という概念は広義と狭義に分けられ、村民は異なる状況では異なるもののことを指していると推定される。「兄弟龍」の対置するのが「恩怨龍」で、歴史上衝突を行ったことのある龍舟のことである。恩怨の龍舟もおなじ「龍舟娘」に帰属することは可能である。瑞安塘下を事例とすると、塘下本鎮龍舟と恩怨の龍舟の関係にあるのは、肇平垵、前池、上馬、新坊、大典下の龍舟である。「恩怨龍」が存在する村の友人の間では、端午の節句の期間は行き来がなくなり、それが過ぎると普段の状態に戻る。

いうことである。温州の塘河は、温州や瑞安も含めて、村落の間を絹の織物が結び付けているかのようで、競漕に適した広い川面が広がっている。かつて東瓯と呼ばれた一帯は、1980年代以来の大規模工業化や城鎮化以前は水郷であったが、80年代以降は水面の多くが埋められてしまい、龍船を造る条件が著しく損なわれた。

自然地理的要因も、フランスの人類学者のモースの言うところの「社会形態学」にあたる。各村落の龍船造りは、隣り合った村落同士で影響し、また競い合うものなのである。さらに村落共同体は、百年以上通婚圏を成しており、近隣村落の龍船は、自分の村落から嫁いだ女性の香案を貰いに行く。このような互酬制は、村落間の関係を強め、モースの言うところの「全体的社会事実」を構築する。

（二）龍舟頭家

龍舟頭家は、龍舟活動の組織者であり、村民から自発的に生まれるものであり、決して公衆が選出するものではない。頭家は一般にはひとつの団体を有している。大体10数人、現地の老年協会の老人が積極的に参加し、頭家およびその団体の構成員には、一般には既婚成人男性になる。新旧の構成員が構成する団体が共同で龍舟競漕に参加するのがこの地方の祭日の特色である。若者は案内状発送や、龍舟銀（龍舟作りの資金）集め、「収香案」の処理、「闘龍」の実行などを主に担当し、「請神」の儀式、喧嘩の仲裁、橋の上の巡回などは年上の人々により準備され指揮される。一般には、村幹部や工場経営者は龍舟頭家にはならない。というのも、龍舟競漕は事故がたびたび起きるので、頭家には責任がかかるからである。近年、龍舟頭家が「チンピラ化」する現象の遠因の一部はここにある。

（三）龍舟銀集め—「媛主銀」と「擺香案」

龍舟競漕は新旧の龍舟の建造や修理を必要とし、各種の器具や衣装、爆竹の買い入れや競漕後の宴会の準備等で資金が必要となるので、十分な資金が龍舟競漕の順調な進行を保証するのである。民間では、このための資金が「龍舟銀」と呼ばれている。明代の姜准、清代の張綱は著作や日記の中で一様に言及している。彼らの言及している「祭戸」や「祭戸之姻親」はすべて龍舟銀を納める習慣であり、今に至るまで続いており、今日の「媛主銀」（別称「新婦銀」）や「利市」に類似している。前者は、父母がその年の花嫁の娘に与える金銭や財産で、「媛主銀」と呼ばれ、花嫁への加護を意味している。後者は、よその村に嫁いだ娘（訳者注：中国語で「外嫁女」というので、以下：「外嫁女」）が「擺香案」の時に実家に送る龍舟の金銭のことであり、姻戚関係を確認するためのものである。外嫁女は社会ネットワークの結節点であり、実家と夫の家と妻の家を結ぶ両村落にとっての重要な紐帯であり、このような婚姻の事実によって発生する社会関係は「擺香案」の過程の中で強化することができる。このほか、擺香案も美名や声望と関係しており、外嫁女は実家に向かって夫の家の経済的社会的地位を見せると同時に、自分の村の人々に対して「面子がたつ」のである。

今のところ、「龍舟銀」の大きな部分は、現地の企業家や工場主から提供され、もし出費がかさめば、龍舟上で「端香闘」を行うが、こうした行動も「端発財」「討吉利」という意味が含まれている。「擺香案」の主体は一番初めは外嫁女であったが、次第に村の集団や工場等の社会単位へと変わっていった。「龍舟銀」で集まるのは、だいたい20万元前後で、これらの資金は1ヶ月ほどの時間のうちにすべて消費されてしまう。

費孝通や楊美恵ら研究者は、改革時期の「温州モデル」の背後の非経済的発展力に注意を払っている。彼らは、市場経済論理の外に消費あるいは「儀礼経済(ritual economy)」の論理があると考え、こうしたロジックは人に自分の存在の限界を越えさせるとした。強調されるのは、請求ではなく、散財である。(趙旭東[赵旭东]、2009)

楊美恵(2000)(2009)(訳者注：楊美恵「伝統、旅行する人類学と中国現代的言説」『中国農業大学学報』(社会科学版)第24巻2号、2007年、30-42頁、および楊美恵「＜温州モデル＞の中の儀礼経済」『学海』2009年、21-31頁)は、自身の長年の温州フィールド調査において、温州経済の奇跡的特徴に関心を持った。すなわち、「儀礼経済」の復興と拡大である。楊はこれら儀礼における散財は温州経済構造に匹敵する個人の蓄財や富の再分配と社区建設において重要な役割を果たした。温州の儀礼経済はジョルジュ・バタイユの言うところの、「自主存在」を追求する自由と権利である。

ここでは、龍船活動の中での儀礼経済描出を試みる。これらの事例は、いくつかの方面では、上記の研究者の観察が実証できると同時に、龍船活動の中での消費の中で見出された事実は彼らの議論に挑戦するものでもある。つまりは、彼らは温州儀礼経済の描出に対して、いくばかりかの理想化や美化を行っている疑いがあるのである。人々の内部に様々な声があることは無視してはならない。

(四) 械闘と衝突

まさに歴史学者の陳熙遠[陈熙远](訳者注：陳熙遠「競漕の中の社会と国家：明清祝祭文化の中の地域アイデンティティ、民間動員と官によるコントロール」『中研院史語所論集』第79巻3号、2008年、417—496頁、原文中文)が指摘している通り、明清以降は、中国の伝統的祭日の中の端午の節句は他の祭日、たとえば元宵(訳者注：陰暦1月15日の夜)に比べて、地域アイデンティティをより強く呼び起こすものとなっている。温州では、宗族の伝統が濃厚で、伝統的龍舟は小社区(村落あるいは城鎮)の共同財産とみなされ、小社区ごとにひとつかふたつの龍舟を有し、舟体の色や旗、衣装には小社区ごとに異なり、各社区を表象するものであった。異なる社区の龍舟は端午の機関には周期的に「闘龍」に集まり、清晩期や民国期以来、龍舟事故を引き起こす械闘(訳者注：素手でなく道具を使った喧嘩)や衝突が頻繁に行われるようになった。競漕中の不正や龍舟事故は地域の歴史的記憶となり、長く続く怨恨を残すので、新時代の政府が民間の龍舟祭を管理する時に、事前に社区間の怨恨を調査し、解消する必要があった⁴。

械闘と衝突の原因は、表面上は龍舟事故により引き起こされることであるが、深く見ると、村落間の各種対立などが集中的に爆発したものなのである。郷土史家の許希濂は、瑞安一帯の龍船造りに現れる故事は都市部と郷村部に分けることができていると考えている。清末民国期に、瑞安都市部の械闘と派閥争いは関連しており、瑞安の農村の塘下、莘塍の械闘は宗族勢力とに関連性を持っている。解放前、瑞安都市部では、内部の水運が発達し、温州における最も有力な交通手段は水路であり、この水路は温瑞塘河に通じている。今日でもなお、西門河埠頭にその旧跡を見ることができ、当時は各種の密輸品、農具、生活用品がこれら港

⁴ 瑞安莘塍鎮の役所でインタビューを行った際に、思いがけず莘塍鎮の龍舟調査チームが作った「龍舟に関する歴史的怨恨情報一覧表」を入手した。その表には、非常に詳しく鎮内外で起きた龍舟に関する衝突の区域、発生原因及び程度が記録してある。

から温州小南門にいたるまで取引され、交易が非常に繁栄していた。ここで、西門派、南門派が形成され、勢力争いや埠頭の争奪戦を繰り広げた。水運は「担幫」を必要とし、多くの荷役夫がいた。埠頭労働者の間では生業の奪い合いが起き、喧嘩も絶えず、埠頭労働者の間で係争が起きても訴訟にはならず、責任は問われなかった。毎年龍船行事が来ると、その場を借りてこのときの怨恨が晴らされることになったのである。

上述の多くの要素、龍舟娘と片区区分、「媛主銀」と「擺香案」、祭日の集中する闘龍などはみな地域社会のネットワークに関連する構造に深く作用し、1年に1度の龍舟競漕はある程度龍舟片区の濃厚な感情を喚起し、古い共同体の境界を再確認させるのである。

三、スポーツ龍舟⁵の地域における伝播

龍舟活動により地域の衝突や械闘がたびたび引き起こされ、龍舟経費の割り当ては各種の不满を募らせ、1991年から2004年に至るまで、温州政府は龍舟を禁止した。2004年の解禁に至り、韓国の江陵による「端午祭」の世界無形文化遺産申請を受けて、中国国内では議論がわきあがった。温州の管轄する異なる県市が管理する龍舟の政策は一致しておらず、瑞安等は2008年以後にもまた禁止された。ここに至り、伝統的龍舟の衰退は明らかとなり、伝承者の断絶（龍舟の禁止は、世代間の龍舟活動の伝承に壁を持ちこんだ）や温州塘河の汚染、端午競漕と大学入試の時期的重なり、高級官僚と民間企業家の反対、巨額の運営コストなどの原因が、伝統的龍舟活動の伝承力の不足へと導いてしまった。生業様式の変化や伝統的住居構造の破壊、外来人口の増加、龍舟活動のための片区共同体の境界の曖昧化が、地域アイデンティティを弱化させた。こうした背景の中、スポーツ龍舟が若年層に関心を持たれ始めたのである。

温州地区がスポーツ龍舟を受け容れた時期は非常に遅く、2004年であった。温州樂清石馬龍舟クラブは最も早く公認されたスポーツ龍舟である。スポーツ龍舟の関心は一方では国際的龍舟のコンテストに関係している。なぜならば、参加するだけで、かならず標準の競漕龍舟が必要となるからである。温州では、スポーツ龍舟の推進と普及は「伝統的龍舟禁止」の流れを借りて、体育局的強制ではなく、完全に自発的な形で進んだ。

今のところ、温州樂清参網龍船掲示板のニュースは基本的には上記のスポーツ龍船が中心で、異なる地区の龍船の間では不定期に「集会」が行われる。「集会」とは、何席かの龍船が約束の場所に集合し、技術を切磋琢磨することである。スポーツ龍船は、新しい外来文化で、自然に「クラブ」の形式になじみ、かつての宗族の色合いは薄い。多くの若者が、スポーツ龍船を受け入れようとしているが、その背景は、これが気軽で気ままな競技だからであるということがあり、樂清の鄭氏が言うように、スポーツ龍船はルールが簡単で、また時期的にも柔軟で、伝統からのプレッシャーも多くないのである。

スポーツ龍船が伝統龍船と衝撃することは明らかなことである。伝統龍船を製造していた職人も多くの取引を失った。温州では今ではほとんどすべてのスポーツ龍船の製造地は、杭州祥瑞や大連である。杭州祥瑞標準龍船会社の唐代表は浙江省富陽の出身で、以前はカヌー製造工場の工場長であった。彼の父親もまたカヌーの製造者であった。ここにもスポーツ龍

⁵ スポーツ龍舟は、競技龍舟であり、標準龍あるいは22人龍と呼ばれる。主に現在のスポーツ行事で用いられる。具体的には、国際標準龍舟と国内標準龍舟は規格が一致してはおらず、大きさが異なる。

船とカヌーとの深いつながりが見られる。スポーツ龍船の普及は、同時に新人の漕ぎ手を伝統的民俗から引き離す結果をもたらしている。スポーツ龍船はすでに広く受け入れられており、温州各地で5人乗り龍船も試され始め、2010年には国家体育总局により各地域で5人乗り龍船についての講習が行われた。スポーツ龍船は常に自身を刷新し続けており、伝統龍船に比べて、もうひとつの「場」と見なせる。スポーツ龍船の発展論理は簡略化する傾向にある。

我々は、スポーツ形態のスポーツ龍舟を一種の文化体系とみなすことができる。このような新しい外来文化は、自然にクラブという形式と関係し、過去の宗族の色合いを拭い去り、龍舟の形状や競技規則はさらに標準化され、時期もまた自由となった。30代、40代の若者は巧妙に伝統的龍舟への愛着をこのようなスポーツ龍舟へと転移させた。過渡期においては、彼らはスポーツ龍舟専用の衣装を着用して、地域社区の伝統的大龍「上水」を手伝い、特定の宗教儀式を完成させ、出来る限り態度の上では比較的気の向くままにしていた。これと同時に、女子スポーツ龍舟クラブも現れ始めた。

調査対象の瑞安動感龍舟クラブを事例とすると、大部分のメンバーは、友人を通して紹介されたり、お互いにネット上で知り合ったりしている。彼らは元々は、各自の社区の中では伝統的龍舟の主力であったが、今では地域の境界を打破して集い、かつては所属していた社区の龍分舟が競争の相手となっている、クラブの普段の活動経費の一部分は会員費で、一部分は外の企業の賛助で賄われ、定期的にネットワーク上で会計を公開している。動感龍舟チームは、自費で国内でだけではなく、香港や台湾の龍舟大会に参加している。よい成績を収め、温州の龍舟クラブ業界では名高い。

四、国家と地域の相互作用の中の温州龍船

無形文化遺産への関心が高まる中で、温州政府は龍舟活動に対して、迅速に新たな動きに出た。新任の市委員会書記の陳某が浙江省の嘉興から温州へ着任し、嘉興時代に全国龍舟大会の招致に成功していたことから、今度はそのモデルを温州へと移植しようとしたのである。2011年以降、まず「温州市第1回龍舟大会」を開催し、温州龍舟協会を設立した。まもなく、龍舟拠点建設した。注目すべきは、龍舟大会や龍舟拠点はみなスポーツ龍舟のためのものだということである。「中国龍舟の街をつくろう」というスローガンがすぐ現地政府の行政の仕事の一つになった。また「龍舟旅行ブランドをつくろう」は近年来全国で流行っている「無形文化遺産申請運動」に呼応したものである。観光産業の発展と伝統民族文化の保護が「文化が台頭すれば、経済も盛んになる」という役人の主流の意識の下で縛られていくようになった。温州政府は伝統民族文化発揚の名の下に、海外華僑華人を動員して龍舟チームを設立させ端午の節句に龍舟競漕に参加させさせた。

温州龍舟は歴史上はずっと地方政府の統制を受け、役人の意識形態の変化が深い影響を及ぼしてきた。現在では、温州龍舟は「地域文化資源」というイメージの特色をもって現われ、開放性の中で新しい意義が求められた。様々な事跡は地域文化伝統を改めて重視しているかのように見える。どうして温州では龍船の解禁と禁止が繰り返された伝統龍舟が姿を変えて改めて歴史の舞台に立ったのか。ここでは、範可(2007)の観察を「他山の石」とすることができる。伝統あるいは文化遺産は「地域」は構成する「地域」の重要な資源となる。多くの地域のイメージ建設もグローバル化と関係している。1980年代には福建省の一部の官吏

が、もし十分に地域の特色を打ち出せれば、外部の関心を惹くことができ、地域の経済発展につながると考えていた。観光業の発展に伴い、世界各地で観光誘致目的の地域文化の伝統復興運動が起きた。温州「地域龍船文化」も新しい意義を見出した。しかし、温州龍船文化復興は、官民双方の局面において、完全に異なるロジックを有し、相互協力は「貌合心離（表面上のみの同調）」であった。民間の関心は外部の関心を集めることにはなく、伝統の慣性によるものであるが、近年では伝統の伝承もおぼつかなくなっている。

五、伝統龍舟からスポーツ龍舟へ―異なる「場所感覚」の構築

かつての研究者はおしなべて伝統的龍舟民俗とスポーツの形をとって現われたスポーツ龍舟とを切り離して論述しており、進化論的な観点を得ただけで、この二者は現地の人々の生活の中ではいかに異なる意味を持っているかについての関心が少なかった。本報告は温州龍舟自身の歴史的文脈を考察するにあたって、伝統龍舟とスポーツ龍舟とが異なる「場所感覚（the sense of place）」を構築することが明らかになった。

伝統的龍舟活動の参加者は過去からの地元宗族や村落連盟の義務に基く「機械的団結」（mechanical solidarity）から解き放たれ、独立した身分でスポーツ龍舟ゲームに参加している。この一連の変化は、外部の中国社会の「個人化」過程が反映している。元々、龍舟に凝集していた「場所感覚」は希薄化あるいは萎縮してしまい、一種のアイデンティティの希求へと転じ、こうした新たなアイデンティティは、さらに開かれた外部世界へと自我を開示することなのである。スポーツ龍舟ゲームの参加者は従来の地域的境界を打破し、「深度遊戯」はここにおいて最も素朴な意味での「競技ゲーム」へと失墜した。スポーツ龍舟活動の区域も徐々に元々の所属していた共同体からは乖離し、物理空間上で言えば、「龍舟拠点建設」が実施され、従来使用していた水域は歴史上の龍舟片区とは無関係な物へと変えられた。感情の面から言うと、スポーツ龍舟の栄枯盛衰は「地域」の発展とは無関係になった。次に、女性は前後の二つの龍舟活動で異なる役割を担っていたが、彼女らも無形のこうした「場所感覚」を作り変えた。女性はかつては社区共同体の付属物の性質があったのが（祭日儀式の準備や、「媛主銀」、「擺香案」）、スポーツ龍舟に参加する独立した個人となった（各種の龍舟大会では、女性のための女子龍舟が設けられている）。興味深いのは、グローバル化を背景として、地方政府は龍舟の特色を借りて「地方性(locality)」文化価値を追求していることである。普遍性（標準化）を追求するスポーツ龍舟と地方の特色を表象する伝統的龍舟のそこでの力関係は考えさせられるものである。

本稿を提出する前に、筆者は故郷の温州に帰って、追跡のフィールド調査を行い、2013年8月8日の温州龍門陳龍船の大会を見学した。会場で筆者は、以前のフィールド調査で知り合った楽清籍の龍船人鄭爽氏と再会した。彼が言うには、ここ2年のスポーツ龍船は、楽清も瑞安も数量的には下降傾向にあるとのことであった。彼の考えでは、その原因は、大きな大会の後には、敗者は意気消沈し、クラブ解散にいたってしまうことにあるという。ひとつの龍船クラブを運営することは容易なことではない。この両年で多くのクラブの間で吸収合併が起き、大会時にメンバーの貸し借りも見られ、こうしたことがいつも練習に参加しているのに、実力から乏しいため大会に参加させてもらえないメンバーの意欲を損なっている。こうした状況を受けて、異なる村落間で端午の節句には、伝統的龍船のメンバーも自由に合流参加し、地域身分もこだわらなくなり、これがまた旧来龍船によって作られていた社区の

境界を薄めるようになった。政府が行う龍船大会もこの過程を激化させた。2012 年の研究の初期段階は、温州龍船の歴史と現状の外観を得るためのものであったが、いまだに細かい具体的な議論には立ち入ることができていない。河合洋尚先生や今中崇文氏ら日本の研究者の薫陶を受けて、温州龍船と外部経済体制の変遷とを考察し、さらに社区内における人間関係が龍船に関連してどのように変化するのかをミクロなレベルから分析すべきであると考えるにいたった。これは今回の京都大学でのワークショップにおける最大の収穫である。

参考文献

(本論文に直接関係する文献のみ以下では挙げている)

- 1 渡辺欣雄『漢民族の民俗宗教：社会人類学的研究』天津人民出版社、1998 年。
- 2 呉麗平「伝統節句と地域社会の関係の構造：温州韓田村端午龍船競漕を事例として」『民俗典籍文字研究』第 4 号。
- 3 中国共産党瑞安市委党史研究室、瑞安市郷土史編纂室編『瑞安龍船活動略史』2004 年（内部資料）
- 4 趙旭東「散財のロジック：温州モデルと金融危機の背景」『探索と争鳴』2009 年 11 号。
- 5 Mayfair Yang, 2000. "Putting Global Capitalism in its Place: Economic Hybridity, Bataille, and Ritual Expenditure", *Current Anthropology*, Vol.41, No.4:447—509.
- 6 楊美恵「＜温州モデル＞の中の儀礼経済」『学海』2009 年 3 月。
- 7 陳熙遠「競漕の中の社会と国家：明清節祝祭文化の中の地域アイデンティティ、民間動員と官によるコントロール」『中研院史語所集刊』第 79 卷第 3 号、2008 年 9 月。
- 8 範可「伝統と地方：＜申遺＞現象が引き起こす思想」『江蘇行政学院学報』2007 年第 4 号。

(翻訳者注：上記では、中国語文献も名称等を和訳してある。原題等は中文論文を参照)

(翻訳：中山大将、巫靚)